

編集室

内科の診察室から…ドリンク 風呂 ペースメーカー

日々診察をしていると、神話というのか、迷信というのか、人々が信じていることと医者との認識の間に大幅のズレを見出すことよくある。いろいろな「迷信」に出会う。

たとえば、あの「ドリンク」。〇〇ピタンとか。なぜあれが薬と同等の効力を発揮すると考えられているのか不明である。「ムカムカするので先生の薬(ちなみにPPI)をやめてドリンクのんだけどまだなおらん」といってこられた方もあり、このような場合、「ドリンク」の地位は薬より上である。

「なぜですか」といって、「今日は風呂に入っただけですか?」とよくきかれる。迷信なのか医学部でちゃんと習ってないだけなのか分からないが風呂が風邪の発症や経過に大きく関わっていると考える人々が多い。

ただ、風呂は医療提供者にとっても関心事である。介護施設では入浴前に血圧測定があり、血圧が高いとお風呂はお預けとなる。そのため、長期間入浴を果たせないケースも結構あるようだ。在宅訪問でわざわざ簡易風呂を持ってきてもらったのに、血圧が高く結局入浴を許可してもらえなかったという話も聞いた。あの血圧測定こそ「迷信」ではないのか。

医療人が風呂を恐れるのにはそれなりの理由がある。ちょっと調べてみたところ、風呂で亡くなる人は年間14,000人もいるそうだ⁽¹⁾。交通事故の死者数の1.5倍だ。死亡の主な原因と目されるのは入浴前後の急激な環境温度変化による循環動態の不安定化だ。脱衣の寒さで血圧があがり、入浴で血圧が急にさがる。とすると入浴前の血圧測定は無意味ではないが、室温管理のほうが大事だろう。驚きのデータは浴室および脱衣場における暖房の普及率と入浴時死亡の発生率の相関⁽²⁾。暖房普及率が約90%のスイーデンでは死亡率が0.5%。対する日本は暖房の普及率が5%に過ぎず、死亡率が20倍の10%だ。

ちなみに韓国はそれぞれ49%と5%でちょうど中間である。風呂にまつわる迷信は、意外なまでに劣悪なわが国の風呂場事情に関係しているのかもしれない。

医学にまつわる迷信の大家を紹介したい。循環器内科同門の小野広一先生だ。彼はこれまで退院日の六曜(大安とか仏滅とか)と予後の関連⁽³⁾、潮の満ち引きと死亡時刻の関連(人は引き潮とともに死ぬのかなど⁽⁴⁾)を明らかにしてきた(結果はいずれも関連なし)。最近彼が検証したのは、心臓ペースメーカーは火葬で爆発するので患者さんの死後、必ず取り出すべし、というのが迷信かどうか、である。というのも、研修医時代あんなにうるさく言われたのに、とりだし忘れてもなにも起こらない事例が散見されるから、だという。調査の結果、ペースメーカーが爆発するのは本当であった。でも大方の火葬場はその程度の爆発には耐えるそうだ。にもかかわらずペースメーカーへの対応は火葬場(自治体)によってなぜか違う。火葬場の裏側には窓のようなのがあり、火加減を監視して人がいるらしい(なんかこわいでしょ)。ペースメーカー除去にうるさい自治体はその監視者保護を重視しているというわけである⁽⁵⁾。大変面白い深い結果である。

いろいろな「迷信」を検証してみた。医療の現場にはあまたの思い込み、思い違いが存在する。このような誤解は不信や係争の元にもなるが、医者は時として思い違いを利用して治療を効果的にしたりもする。プラセボ効果とはそういうことだ。これからも迷信とは楽しく付き合っていきたいと思う。

- (1) 東京都健康長寿センターのホームページ。
- (2) 鶴野日出男 ホームページ
- (3) 日本医師会雑誌 (0021-4493)137巻4号 Page752-757(2008.07)
- (4) 広島県医師会速報2171号
- (5) 2014年日本循環器学会 中国四国地方会で発表

(小園 亮次)

広島県医師会速報 2015年(平成27年)3月15日

- 発行所／一般社団法人 広島県医師会 〒733-8540 広島市西区観音本町一丁目1番1号 TEL 082-232-7211 FAX 082-293-3363
広島県医師会HP <http://www.hiroshima.med.or.jp/> E-mail: kouhou@hiroshima.med.or.jp
- 編集者／広島県医師会長 平松 恵一
(広報委員)山中 祐介、小園 亮次、高路 修、佐々木 達、佐々木 龍司、谷 充理、中尾 三和子、平林 直樹、
正岡 良之、吉田 良順、小笠原 英敬、水野 正晴、岩崎 泰政
- 印刷所／レタープレス株式会社 〒739-1752 広島市安佐北区上深川町809番地の5 TEL 082-844-7500 FAX 082-844-7800